

喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

県営畑地帯総合土地改良事業(島中地区)に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

島 中 B 遺 跡 II

1989年3月

鹿児島県大島郡喜界町教育委員会

序 文

わが喜界島は、新世代第3紀鮮新世の島尻層を基盤に、球琉石灰岩・志戸桶層隆起珊瑚礁砂丘の地層から形成された島です。

本町における埋蔵文化財の最初の発掘調査は、昭和32年に九学会によって行われ、荒木農道遺跡、藪島神社などいくつか発見され、縄文後期の土器片（宇宿式土器）が、また喜界高校校庭からは、縄文前期の縦式土器に相似した土器片が出土しています。

そうした中で、昭和61年度には先山遺跡発掘と熊本大学によるハンタ遺跡の発掘調査がなされ大きく前進した年でありました。

今回は「県営畠地帯総合土地改良事業（島中地区）」の実施に伴い、第二次の「島中B遺跡発掘調査事業」として県教育委員会の指導援助を得て発掘調査を実施することができました。

本書は、その報告書であります。この調査結果が土地改良事業実施にあたって適切に活用されるよう念願するとともに文化財保護に活用いただければ幸いです。

尚、炎天下のもと大変なご尽力をくださった県文化課の調査員の先生方をはじめ指導者、作業協力者及び協力いただいた地主の方々に厚くお礼申し上げます。

平成元年3月

喜界町教育委員会

教育長 折田国雄

例　　言

1. この報告書は、県営畠地帯総合土地改良事業（島中地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は喜界町教育委員会が主体となり、発掘調査は鹿児島県教育庁文化課に依頼した。
3. 本書で用いたレベル数値はすべて海拔絶対高である。
4. 遺物番号はすべて通し番号であり、本文及び挿図・図版の番号は一致する。
5. 遺物の実測・トレース及び写真撮影は、鶴田静彦が行った。
6. 遺物は喜界町教育委員会で保管し、展示・活用する計画である。
7. 本書の執筆分担は次の通りで、編集は鶴田が行った。

第Ⅰ章、第Ⅲ章、第Ⅳ章、第Ⅴ章　　鶴田
第Ⅱ章　　井ノ上秀文

目 次

序文	
例言	
第Ⅰ章 調査の経過及び組織	5
第1節 調査に至るまでの経過	5
第2節 調査の組織	5
第3節 調査の経過及び概要	6
第Ⅱ章 遺跡の位置及び環境	8
第Ⅲ章 層 序	13
第Ⅳ章 発掘調査の概要	19
第Ⅴ章 まとめ	30

挿 図 目 次

第1図 町内の遺跡	11
第2図 遺跡周辺の地形	14
第3図 遺跡の位置および調査地点	15
第4図 第1地点グリッド配置図及び出土状況平面図	17
第5図 第1地点出土遺物(1)	20
第6図 第1地点土層断面図	21
第7図 第1地点出土遺物(2)	22
第8図 第1地点出土遺物(3)	23
第9図 第1号トレンチ出土状況・土層断面図	24
第10図 第2号トレンチ土層断面図	25
第11図 第3号トレンチ出土状況・土層断面図	26
第12図 第4号トレンチ出土状況・土層断面図	27
第13図 第3・4号トレンチ出土遺物	27
第14図 遺跡周辺での採集遺物	28

図 版 目 次

図版 1-1	第1地点出土状況	33
図版 1-2	類須恵器出土状況	33
図版 1-3	A-3区土層断面	33
図版 1-4	第1地点出土遺物	33
図版 1-5	第1地点出土遺物	33
図版 1-6	第1地点出土遺物	33
図版 2-1	第1号トレンチ出土状況	34
図版 2-2	第1号トレンチ土層断面	34
図版 2-3	第1号トレンチ出土遺物	34
図版 2-4	第2号トレンチ土層断面	34
図版 2-5	第1地点発掘風景	34
図版 2-6	第1号トレンチ発掘風景	34
図版 3-1	第3号トレンチ出土状況	35
図版 3-2	第3号トレンチ土層断面	35
図版 3-3	第3号トレンチ出土遺物	35
図版 3-4	第4号トレンチ出土状況	35
図版 3-5	第4号トレンチ土層断面	35
図版 3-6	第4号トレンチ出土遺物	35
図版 4-1	遺跡周辺での採集遺物	36
図版 4-2	遺跡周辺での採集遺物	36
図版 4-3	遺跡周辺での採集遺物	36
図版 4-4	第3・4号トレンチ発掘風景	36
図版 4-5	整理作業風景	36
図版 4-6	整理作業風景	36

第Ⅰ章 調査の経過及び組織

第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県農政部（農地整備課・喜界土地改良出張所）は、大島郡喜界町島中地区の県営畑地帯総合土地改良事業（島中地区）を計画し、実施計画地域内における埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育委員会（文化課）に照会した。

これをうけて、昭和61年4月、文化課で当該地区的分布調査を実施したところ、昭和63年度工事実施予定地区内に島中B遺跡の存在が確認された。

この結果に基づき、農地整備課（喜界土地改良出張所）、文化課、喜界町教育委員会の間で事業の推進と埋蔵文化財の保護に係る協議が行われ、昭和63年度国・県の補助を得て、喜界町教育委員会が調査主体となって、遺跡の範囲・性格を確認するため発掘調査を県文化課に依頼して実施した。

確認調査の結果に基づき、関係者による再協議を行い、島中B遺跡のうち設計変更により埋蔵文化財の保護が図れない幹線道路建設部分については、記録保存のため緊急発掘調査を行うこととなった。調査は喜界町教育委員会が調査主体者となり、県文化課に依頼して実施することとなった。

発掘調査は、昭和63年10月18日から昭和63年11月4日まで実施し、その後県教育庁文化課収蔵庫において整理・報告書作成作業を行った。

第2節 調査の組織

調査主体者 喜界町教育委員会

調査責任者	タ	教育長	折田国雄
調査事務担当者	タ	社会教育課長	太利博美
	タ	課長補佐	築園清光
	タ	社会教育主事	坂元洋三
	タ	社会教育指導員	西島昭雄

発掘調査担当者 鹿児島県教育庁文化課文化財研究員 鶴田静彦

なお、調査企画等に関し、県教育庁文化課長吉井浩一、同課長補佐奥園義則、同主幹立園多賀生、同文化財研究員兼埋蔵文化財係長吉元正幸、同企画助成係長京田秀允氏等の指導・助言を得た。

第3節 調査の経過及び概要

工事期日及び発掘時期等の諸事情により付帯工事が先に行われ、発掘予定地点は盛土により保護されて工事用道路として使用されていた。そこで、調査は盛土の除去作業から開始した。ところが、盛土及び包含層は喜界島特有の粘質の土壤である。その上に、工事用車両や重機の

往復により固く踏みしめられていたため、盛土除去及び発掘調査は困難を極めた。また、発掘予定地の中央を縦断するようなかたちで製糖工場の水道本管もすでに埋設されていた。

調査予定地は、当初舗装道路建設の計画であったが、その後、砂利道に設計変更されたため、調査方法をトレンチによる調査に切り替えて、遺跡の範囲を再度確認することとした。そのため、残りの部分については現状保存することとし、発掘調査を終了した。

また、期間中に立ち会い調査の予定であった遺跡の北西端の水路はすでに工事が完了しており、調査は行えなかった。

なお、発掘面積は 121m² であった。

以下、日誌抄により略述する。

- 10月18日(火) 町教育委員会にて調査の打ち合わせ。現地にて喜界土地改良出張所職員とち合わせ後、重機により盛土の除去作業を開始。水道管が埋設されているとの連絡があり、明日、喜界土地改良出張所職員・業者立ち会いのもとで盛土の除去を行うこととなる。
- 10月19日(水) 関係者立ち会いのもとに盛土の除去。発掘用具運搬、点検。作業員に調査上の留意点等の説明。グリッド設定。県文化課に現在の状況を連絡。
- 10月20日(木) A－1区・B－1区の掘り下げ。類須恵器片・白磁片出土。
- 10月21日(金) 晴天続きで土が硬質となり、クラックが多数発生し、山歎では作業が進まずフルハシを用いて作業を行う。テント設営により休憩所が確保出来る。
- 10月22日(土) A－1区・B－1区出土遺物の平板測量・出土状況写真撮影・遺物取り上げ。A－2・B－2区の掘り下げ。
- 10月24日(月) A－2区・B－2区出土遺物の平板測量・出土状況写真撮影・遺物取り上げ。A－3区の掘り下げ。
- 10月25日(火) A－3区出土遺物の平板測量・出土状況写真撮影・遺物取り上げ。A－4区の掘り下げ。町教育委員会にて協議の結果、残りの約 400m² についてはトレンチにより再度の確認調査を行い、範囲をとらえて現状保存することとなる。
- 10月26日(水) A－4区出土遺物の平板測量・出土状況写真撮影・遺物取り上げ。トレンチによる調査地区の盛土を重機により除去。第1トレンチの設定・掘り下げ。木製の杭が役に立たず鉄筋を杭代わりに用いる。
- 10月27日(木) A－1区～A－4区北東部分の深掘り。第1トレンチの掘り下げ。
- 10月28日(金) A－1区～A－4区北東壁の土層図作成及び写真撮影。第2・3・4トレンチの設定・掘り下げ。
- 10月31日(月) 第1トレンチ出土遺物の平板測量・出土状況写真撮影・遺物取り上げ。500分の1の位置図作成。
- 11月1日(火) 第2トレンチからは、遺物が出土せず。昨日に引き続き 500分の1の位置図作成。折田喜界町教育委員会教育長来訪。

- 11月2日(水) 第3・4トレンチ出土遺物の平板測量・出土状況写真撮影・遺物取り上げ。
第1・2・3・4トレンチの土層図の作成。第3トレンチにおいて、火山灰と思われる層を確認。調査終了後の埋め戻しについて、喜界土地改良出張所と協議。
- 11月4日(金) 折田喜界町教育委員会教育長来跡。為岡喜界土地改良出張所所長来跡。発掘用具水洗い後、点検・運搬・収納。本日にて発掘を終了。



遺 跡 遠 景

第Ⅱ章 遺跡の位置及び環境

島中B遺跡は、鹿児島県大島郡喜界町島中に所在する。

遺跡の所在する喜界町は、奄美群島の中の1つ、喜界島に位置しており、1島で1町をなしている。

喜界島は鹿児島からおよそ380km南に位置しており、奄美大島からはおよそ42km東方に位置している。北東から南西にかけて細長い島で、長さはおよそ14kmである。北東部から南西部にかけてだいに幅を広げ、最大幅はおよそ8kmである。島の周囲は約48km、面積は約56km²である。

喜界島は概して平坦な隆起珊瑚礁の島で、島の中央東側の百之台で標高224mである。この百之台を中心に北西側へは緩やかに傾斜し、60m～10mの広い段丘地形が見られる。一方、これに対して南東部は急崖となり、海岸線にそってわずかな平坦地が見られるのみである。

河川の発達に乏しく、用水はそのほとんどを地下水や湧水に依存している。

気候は亜熱帯性気候で、年平均気温23℃と年間を通じて温暖であり、年降水量も2,100mmに達する。全島、ガジュマル等の常緑樹におおわれており、ブーゲンビリアやハイビスカスが咲きみだれ、特に、新緑の頃には自生のグラジオラスや白ユリが彩りをそえている。

本島の基盤をなしているのは、新生代第三期鮮新世の島尻層で、琉球石灰岩、志戸桶層、隆起珊瑚礁、砂丘が上層を形成している。暗赤色土壤（マージ）が島の大部分を覆っている。

起伏の少ない平坦な地形のため耕地面積が多く、農業が島の主要な産業である。温暖な亜熱帯性気候を利用して栽培されるサトウキビが島の主要農産物である。また、近年スイカやメロン等の園芸作物も栽培されるようになってきている。伝統産業の大島袖も島のだいじな産業のひとつである。昭和49年奄美群島国定公園に指定された美しい珊瑚礁や、砂丘などは貴重な観光資源となっている。

喜界島も他の大島群島の例にもれず、琉球王朝、薩摩藩の支配下に置かれており、特に薩摩藩の圧政に島民は苦しめられた。これ以前の時代については源氏や平氏にまつわる言い伝えや地名が残っている。大字湾坊主前には僧俊寛の墓と伝えられるものが存在する。志戸桶の「七城」や早町の「平家森」は平家の落人の残したものであると伝えられている。小野津の雁股の泉については為朝にまつわる伝説も残っている。

明治以降は、湾及び早町を中心に行行政区画の合併分離が何回かおこなわれ、終戦後は米軍政下に入り、昭和28年鹿児島県大島郡下に復帰し、昭和31年に喜界町と早町村が合併して現在の喜界町が成立した。

遺跡の所在する島中地区は、島のほぼ中央部や北側に位置しており、島内の最高所である百之台北側の緩傾斜面に位置する。百之台からの傾斜が緩やかになる山裾に集落が広がり、同様に北側には大朝戸、西目、南側には滝川、城久の集落が存在する。集落付近から傾斜が緩やかになり、県道喜界島循環線の走る中間、池治の集落を経て珊瑚礁の広がる海岸へとつながる。

集落の西側及び北側は標高10m～50mの緩やかな傾斜の畑となり、サトウキビの栽培がなされている。畑の中を島中の南側の滝川集落の湧水を源とする小川が流れている。

島中B遺跡は集落の北西側の畑の中に位置している。この畑は海岸へむかって緩やかに傾斜しており、遺跡の標高はおよそ40m～30mである。

喜界島における本格的な考古学的研究は1935年（昭和10）にさかのぼる。1935年、三宅宗悦は鴻尋常高等小学校の新校舎前の一樹の根元付近の残土の中に南島式土器片と貝殻を確認し、^{註1} 湾貝塚として報告している。また、手久津久でも島を一周する新道工事中に破壊された遺跡を確認し、^{註2} 南島式土器片や石斧断片、貝殻を探集しており、手久津久貝塚として報告している。

1955年（昭和30）から3年間、九学会連合奄美大島共同調査委員会考古学班により南島の調査が行われ、その一環として昭和32年に喜界島の分布調査が実施されている。その報告には荒木農道遺跡、荒木小学校遺跡、^{註3} 湾天神貝塚、伊実久嚴島神社貝塚、七城等が紹介されている。荒木農道遺跡は農道工事の際、周囲に礫を配し、腕に貝輪をはめた人骨が出土し、採集した上腕骨に巻貝を輪切りにして作った白玉類似品が数個挿入されていた。ほかに付近から櫛石、沈線文を施した土器の小片が出土しており、その時期は宇宿上層式に該当するものと思われるとしている。

荒木小学校遺跡は校内北東隅の採土の際、人骨が出土し、宇宿上層式の土器片が散布しており、小学校西側の道路工事の際にも多くの人骨が出土し、付近には定角式の磨製石斧の出土も見られるとしている。

湾天神貝塚は神社建立の際表土を削平したものと思われ、石斧、土器片、貝器、骨片、歯骨、貝類等が出土する。土器は小片のため形式の判別が困難であるとしている。

嚴島神社貝塚は土器片、石器断片、歯骨、貝類等を出土する宇宿上層式の遺跡であるとしている。

1917年（大正6）地元の竹下軍陸氏により七城から採集された須恵器5個と滑石製石鍋1個についても報告している。

他に小野津、志戸桶、伊実久等の採集遺物についても報告している。

荒木農道遺跡について、上原静氏は1982年（昭和57）採集されたホラガイ製利器、蝶蓋製貝斧土器片について考察し、土器片は弥生中期末頭のものと、地元産のものの可能性のあるものとがあるとしている。^{註4}

七城出土の須恵器と報告されている陶器については、このような陶器が南西諸島に分布することに注目し、本格的に報告したのは河口貞徳氏であった。この陶器は南西諸島を研究する人々は何らかのかたちで論及しているが、白木原和美氏はこの陶器を「類須恵器」として奄美大島徳之島、喜界島出土のものを集成している。このなかで喜界島のものは川嶺、志戸桶七城、志戸桶当地、羽里、小野津等出土のものが報告されている。^{註5}

この類須恵器については、1984年（昭和59）に徳之島の伊仙町で地元の四本延宏・義恵和氏により窯跡が発見され、発掘調査が実施された。その結果、11～13世紀のものと考えられ、類

須恵器について貴重な資料を提供した。^{註7}

1986年（昭和61）には白木原和美氏（熊本大学）により、島の中央部北側よりに位置するハンタ遺跡の発掘調査が実施された。調査の結果、宇宿上層式期の住居址群やかまと状造構等11基の造構が確認された。遺物は面繩西洞式、喜念I式、宇宿上層式等の土器と、石斧、敲石、クガニイシ、石皿、有溝の磁石等の石器が出土している。住居址の構造について論及し、土器の胎土分析も行われている。

また、ハンタ遺跡の調査と平行して町内の遺跡の分布調査も実施されている。その結果、それまで10箇所たらずであった遺跡の数が40ヶ所近くと急増している。^{註8}

同年には町教育委員会により島の南東部に位置する先山遺跡の発掘調査も実施され、兼久式土器や螺蓋製貝斧等が出土している。^{註9}

註1 三宅宗悦 南島の先史時代 「人類学・先史学講座第16巻」 雄山閣 1941

註2 (1)に同じ

註3 国分直一・河口貞徳・曾野寿彦・野口義磨・原口正三 奄美大島の先史時代

『奄美その自然と文化』 九学会連合奄美大島共同調査委員会 1959

註4 上原静 奄美・喜界島荒木農道遺跡出土のイトマキボラ製利器・弥生式土器他

『南島考古8号』 沖縄考古学会 1983

註5 河口貞徳 南島先史時代 『南方産業科学研究所報告第1巻2号』

鹿児島大学南方産業科学研究所 1956

註6 白木原和美 類須恵器集成（奄美大島・徳之島・喜界島）

『南日本文化6号』 鹿児島短期大学南日本文化研究所 1956

註7 伊仙町教育委員会 『カムィヤキ古窯跡群Ⅰ・Ⅱ』 1985

註8 喜界町教育委員会 『ハンタ遺跡』 1987

註9 (8)に同じ

註10 喜界町教育委員会 『先山遺跡』 1987

他に『鹿児島県地名大辞典』 角川書店 1983

『鹿児島大百科事典』 南日本新聞社 1981

風土と文化 『鹿児島県風土記』 鹿児島県書店組合 1982

等を参考にした。



第1図 町内の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	地形	遺物等	備考
1	八幡神社境内祠	小野津			
2	下田の滝周辺	伊実久	砂丘上	類須恵器	
3	伊実久貝塚	。	台地先端	宇宙上層式、青磁、石器、獸骨、貝	
4	大城久	伊砂	段丘上	類須恵器、青磁、フイコ羽口、鉄津	
5	伊砂一帯	。		石器(閃石)、フイコ羽口	
6	アギ小森田	坂畠アギ小森田	砂丘上	面鏡東洞式、嘉徳I式、石器、類須恵器	
7	前田	坂畠前田	丘陵先端	宇宙上層式、類須恵器、青磁、染付、石器	
8	上	砂	段丘上	土器、類須恵器、石器	
9	川	堀中能川堀	。	宇宙上層式、類須恵器、青磁、染付、石器	
10	柏	毛	西目柏毛	。	土器、類須恵器、青磁、白磁、石器
11	上戸間	西目上戸間	。	土器、類須恵器	
12	ハシタ	西目半田	。	齊高I式、宇宙上層式、類須恵器、 石器、住居址	昭和61年7月調査
13	知無田・能間	大朝戸知無田・能間	。	土器、類須恵器、青磁、染付、石器、羽口	
14	中能	中能	台地先端	陶磁器、石器	
15	先内	先内	段丘上	土器、陶磁器、石器	
16	島中	島中	。	類須恵器、青磁、石器、羽口	
17	赤連	赤連	砂丘上	土器(赤連系)	
18	浜川郷	赤連		石器	
19	鴻天神貝塚	鴻	砂丘上	石器、石器	
20	総合グラウンド	鴻久大真	。	喜徳I・II式、土製品、貝	
21	中里貝塚	中里	。	土器、石器、貝	
22	荒木小学校	荒木	。	石器、人骨	
23	荒木貝塚	荒木	丘陵先端	石器、貝	
24	荒木農道	荒木	砂丘上	宇宙上層式、貝輪、人骨、玉類	
25	手久津久貝塚	手久津久	。	石器	
26	上嘉鉄	上嘉鉄大供	。	宇宙上層式、喜窓I式、類須恵器、 青磁、石器	
27	先山	浦原先山	傾斜地	豪久式、蝶蓋製貝斧、石器	昭和61年7月調査
28	長嶺	長嶺	段丘上	類須恵器、滑石製石鍋	
29	早町中学校	早町	砂丘上	石器	
30	平家森	早町上ケ田	台地上	甕割	
31	七城	志戸橋増ヶダ	台地先端	類須恵器、土壙状造構	
32	志戸橋	。			
33	川峰グスク	志戸橋川峰		滑石製石鍋、南蛮鏡、琉璃體、琉璃 玉類、古伊万里	
34	坂元	坂元		類須恵器、青磁、染付、滑石製石鍋	
35	当地	。		類須恵器、滑石製石鍋、玉類	
36	振川	振川	砂丘上	土器、貝刃、貝	
37	志戸橋貝塚	。			
38	島中B	島中	丘陵傾斜地	類須恵器、白磁	今回調査

第Ⅲ章 層序

発掘調査区域は、標高30mから40mの緩やかな畠地帯である。畠の地力回復のために天地返しを行っている箇所及び工事用道路の建設のため、包含層まで削平されている部分もみられた。層位は、場所により若干の相違が見られるが、基本的な層位は以下の通りである。

I層 深褐色の表土。場所により若干の違いがみられる。

II層 淡褐色を呈した硬質の粘土である。乾くとクラックが発達する。青磁・白磁・類須恵器等が出土する。

III層 淡黒褐色を呈し、粘質をおびた硬質土である。乾くとクラックが発達する。II層と同様に青磁・白磁・類須恵器等が出土する。

IV層 明黄褐色を呈し、ブロック状に点在して存在する火山灰である。^{註11}また、風化が激しくローム化が進行している。第3トレンチ及びA-4区南東部分のみに観察される。他では明確な識別はできないが、土層中に含まれる可能性がある。

V層 淡黒褐色を呈し、粘質をおびた硬質の土である。乾くとクラックが発達する。

VI層 明黄褐色を呈し、粘質をおびた硬質土である。乾くとクラックが発達する。場所によつては色調が赤褐色あるいは茶褐色を呈した樹根あるいは自然のものと考えられる黒褐色あるいは茶褐色の落ち込みがいたる所に見られる。

VII層 石灰岩

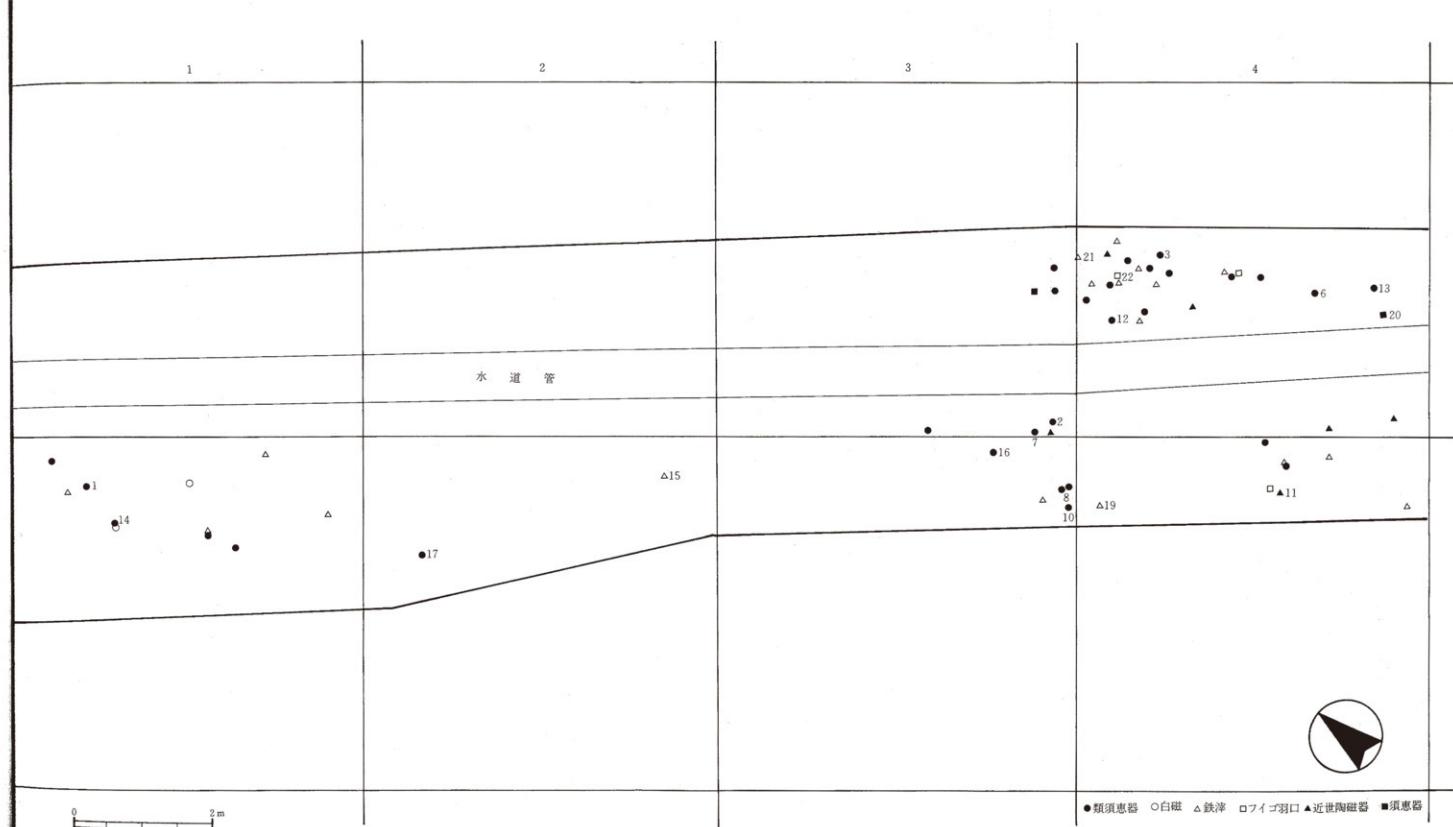
註11 成尾英仁氏の御教示による。



第2図 遺跡周辺の地形



第3図 遺跡の位置及び調査地点



第4図 第1地点グリッド配置図及び出土状況

第IV章 発掘調査の概要

第1地点

第1地点は、第4図に見られるようなグリッドを5m四方で設定し、北西端から南西へA～B、北東へ1～4の番号をつけた。

A・B-1区より西側は、工事用道路建設のため削平されており、A・B-1区にⅢ層、A・B-3・4区にⅡ層、Ⅲ層が残存しているのみであった。特に、A・B-4区のⅢ層は微細の炭化物を多く含んでいた。

1～18は類須恵器の破片であり、いずれも焼成は良好で焼きしまっている。

1～4は口縁部である。1・4は摩滅が激しく、調整等は明らかではない。2は復元口縁径が9.5cmである。1・2・4は青灰色を呈するが、3のみは黒茶褐色を呈している。

5～6は口縁部から胴部にかけての壺の破片であり、5は外面に叩きの重複痕、内面に端部が弧状になる格子目叩きがみられる。6は内面にわずかに格子目叩きがみられる。

7～16は胴部の破片であるが、器種は明らかでない。7は外面は平行叩き、内面はロクロによるナデ整形が行われている。8は叩きの後、ナデ整形を施している。9・10は外面に平行叩きがみられる。10は灰茶褐色を呈す。

11は外面に綾杉状の叩き、内面に格子目叩きがみられる。12は外面が平行叩きの後、ナデ整形を施し、内面に格子目叩きがみられる。13は外面が綾杉状の叩きの後、ナデ整形、内面は叩きの後水引仕上げを施している。14は外面がやや茶褐色を呈し、タタキの後、ナデ整形を施している。内面は青灰色を呈し、凹線調整痕がみられる。15は外面に平行叩きの後、ナデ整形を施し、内面に格子目叩きがみられる。16は甕の把手であると考えられる。張り付け後、ナデ仕上げを行っており、先端部は欠損している。18・19は底部の破片であるが、器種は明らかでない。

19は外面が黒茶褐色、内面が灰茶褐色を呈し、外面に3本の弧状の沈線と2本の平行な沈線を施している。胎土は緻密で焼成は良好である。類須恵器にはみられない文様である。

20は内外面とも乳灰色を呈し、外面に叩きがみられる須恵器である。

21は砂岩を素材とした磨石の一部である。

22は筒状をなす土製のワゴの羽口であり、復元内径が2.5cm、復元外径が5.5cmである。

23～35は、攪乱層より出土した遺物である。23は白磁の碗の口縁部であり、玉縁の口縁をもち、磁胎は灰白色である。

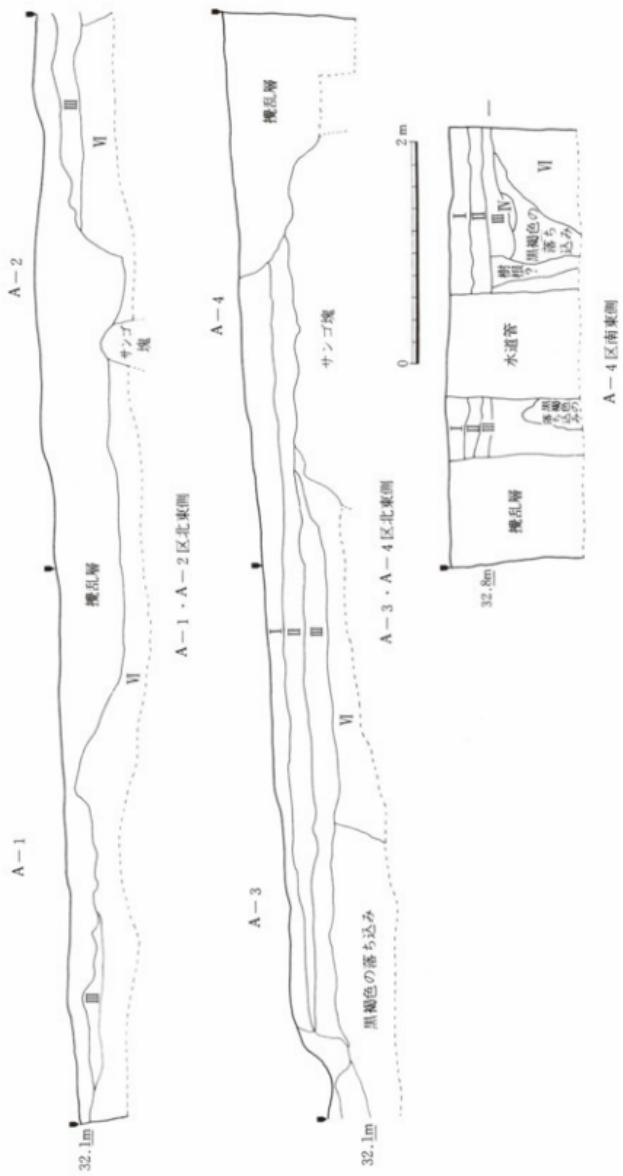
24～35は類須恵器である。内外面は青灰色を呈し、内部が褐色でサンドイッチ状の様相を呈するものもある。

24は復元口縁径が13.5cm程の壺の口縁であり、外面はナデ整形、内面は叩きの後、ていねいなナデ整形を施し、口縁内部に一条の凹線がみられ、口唇は平坦面を呈している。



第5図 第1地点出土遺物(1)

第6図 第1地点土層断面図





第7図 第1地点出土遺物(2)

25・26・27・28・29は外面に平行叩きの後、ナデ整形を施し、26・27・28の内面は格子目叩きがみられる。30は外面に格子目叩きの後、ナデ整形、内面は粗いナデ整形を施している。

31は外面に綾杉状の叩き、内面に格子目叩きがみられる。32は外面に重複する叩き、内面に格子目叩きがみられる。33は外面にヘラ描きの波状沈線文をもつ壺の破片であり、内面は叩きの後、ナデ整形を施している。

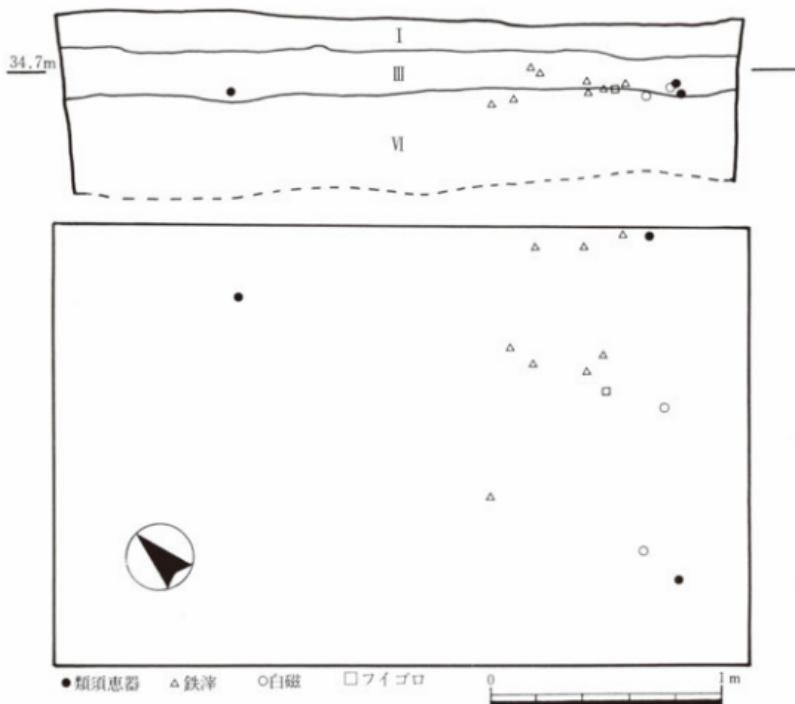
34・35は比較的底の薄い底部であるが、破片であるため器種は明らかでない。

第1地点からは、その他に鉄津・染付・近世陶磁器等が出土した。



第8図 第1地点出土遺物(3)

第2地点

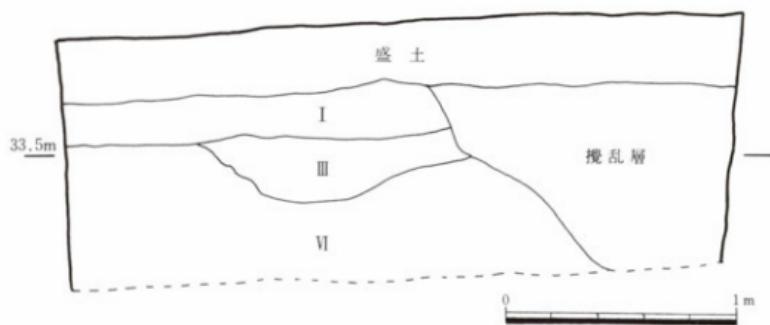


第9図 第1号トレンチ出土状況・土層断面図

第1号トレンチは、第1地点の南西10mの標高約32mの地点に $3 \times 2\text{ m}$ の大きさで設定した。層位はⅠ・Ⅲ・Ⅴ層が認められ、包含層であるⅡ層・Ⅲ層のうちⅡ層は畑地の天地返し等によりすでに削平されていた。

出土遺物は小片の鉄滓が大部分で、他に類須恵器が3点、土製のフイゴの羽口が1点、白磁片が2点出土したが、いずれも小片で図化しえなかった。

第2号トレンチ



第10図 第2号トレンチ土層断面図

第2号トレンチは、第1号トレンチの南西30mの標高約35mの地点に $3 \times 2\text{ m}$ の大きさで設定した。

層位はI・III・VI層が認められ、包含層であるII・III層のうちII層は畠地の天地返し等により削平され、III層がわずかにレンズ状に残存するのみであり、遺物は出土しなかった。

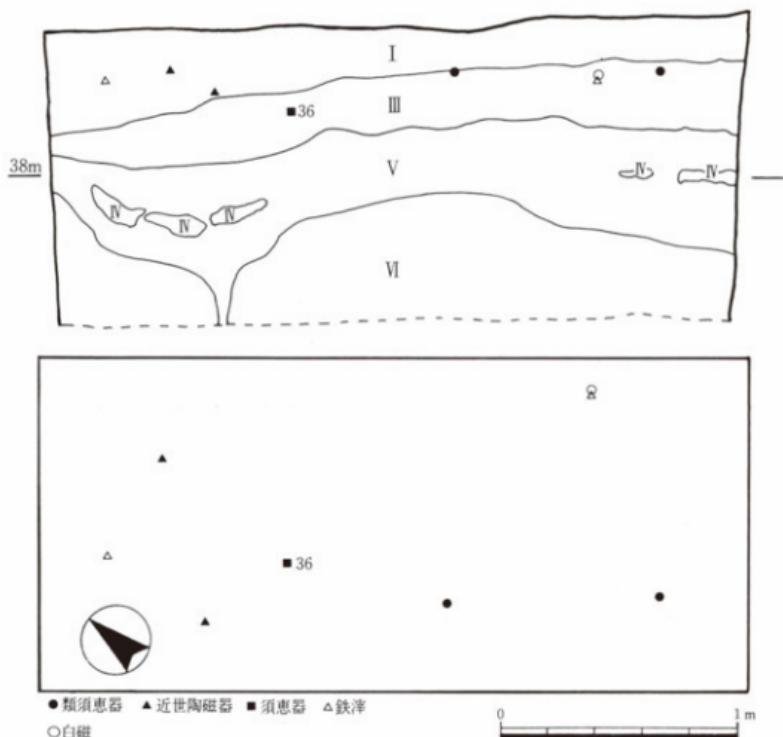
第3号トレンチ

第3号トレンチは、第2号トレンチの南西70mの標高約37mの地点に $3 \times 1.5\text{ m}$ の大きさで設定した。

層位はI・III・IV・V・VI層が認められ、包含層であるII・III層のうちII層は畠地の天地返し等により削平され、III層のみが残存していた。IV層は明黄褐色を呈する火山灰で、ブロック状に点在し、風化が激しくローム化が進行している。V層は淡黒褐色を呈し、粘質をおびた硬質であり、乾くとクラックが発生するものである。本トレンチでは北西側で落ち込んでいる。VI層は明黄褐色を呈し、V層と同様に粘質をおびた硬質土であり、乾くとクラックが発達する。本トレンチでは北西側でやや暗い色へと変化している。出土した遺物は、類須恵器片2点、須恵器片1点、鉄滓2点、近世陶磁器片2点であった。

36はIII層より出土した須恵器と思われるものである。内外面とも乳灰色を呈し、外面には叩きと思われるものがわずかにみられるが、内外面とも摩滅が激しい。

その他の出土遺物は小片であり、図化しえなかった。



第11図 第3号トレンチ出土状況・土層断面図

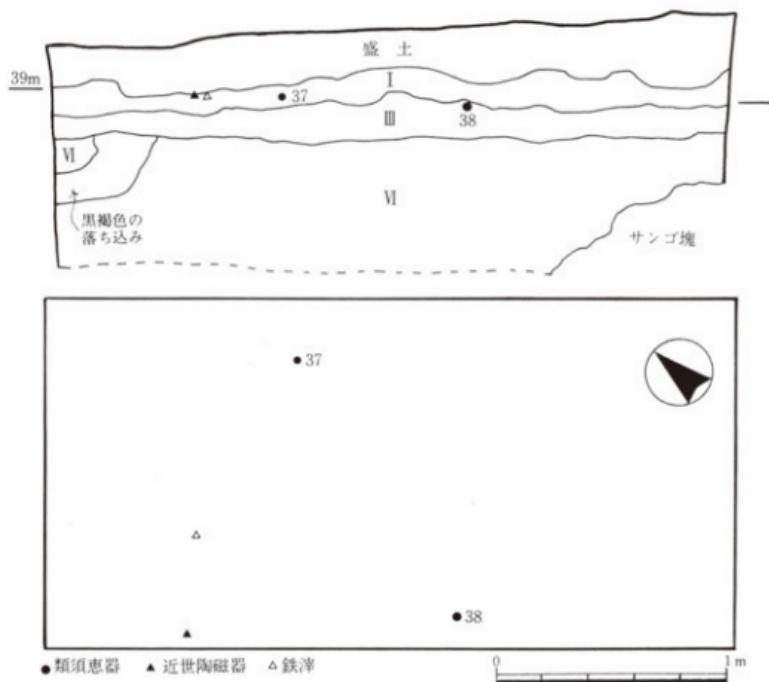
第4号トレンチ

第4号トレンチは、第3号トレンチの南13mの標高約39mの地点に3×1.5mの大きさで設定した。

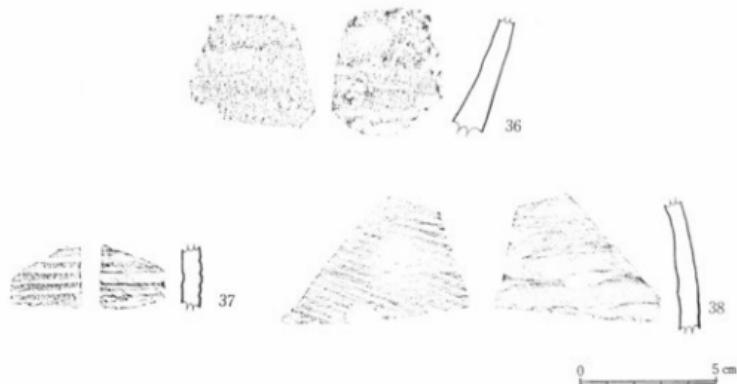
層位は第1号トレンチ、第2号トレンチとほぼ同様の様相を呈していたが、VI層に黒褐色の落ち込みがみられた。

出土遺物は類須恵器2点、鉄滓1点、近世陶磁器片1点であった。

37・38はともに類須恵器であり、内外面ともに青灰色を呈している。2片とも小片のため器種は明らかでない。37はI層からの出土である。外面に平行叩き、内面に凹線調整痕がみられる。38はIII層からの出土で、外面に平行叩きがみられ、内面は粗いナデ調整を施している。



第12図 第4号トレンチ出土状況・土層断面図



第13図 第3・4号トレンチ出土遺物



第14図 遺跡周辺での採集遺物

遺跡周辺での採集遺物

以下の遺物は、遺跡周辺での採集遺物である。調査に参加した作業員の方が遺跡周辺で採集したものをお供して下さったものである。

39～49は類須恵器である。39はやや外反する壺の口縁部である。内外面とも水引き調整痕がみられる。40は復元口縁径が17cm程の壺の口縁部であり、口唇部内側には段が施され、内外面ともロクロによる丁寧なナデ仕上げが行われている。41は口縁部が大きく外反する小型の壺であると思われ、40と同様に口唇部内側には段が施され、内外ともロクロによる丁寧なナデ仕上げが行われている。

42～49は胴部の破片であるが、器種は明らかでない。42～44は外面に平行叩きの後、ナデ仕上げが施され、内面は42・43が格子目叩きの後、ナデ整形、44はロクロによる整形が施されている。

45は外面が重複する平行叩き、内面に格子目叩きがみられる。46も45同様に外面は重複する平行叩きがみられ、内面は粘土の継ぎ目がわかる程の粗いロクロによるナデ整形が施されている。47は外面に綾杉状の叩き目、内面に格子目叩きの後、両面ともナデ仕上げが施されており、やや褐色を呈している。48・49は外面が叩きの後、丁寧なナデ仕上げ、内面は格子目叩きの後、粗いナデ仕上げを施している。

50～52は須恵器であり、内外面ともに乳灰色を呈し、胎土は緻密で焼成は良好である。50は内外面ともに平行叩きがみられる。51は外面に平行叩きがみられ、内面は丁寧なナデ仕上げである。52は外面に格子目叩きがみられ、内面は叩きの後、丁寧なナデ仕上げが施されている。53・54は白磁の碗の口縁部であり、玉縁の口縁をもち、磁胎は灰白色である。

55は内黒土師器の塊の底部の破片であると考えられる。内面は黒褐色を呈し、底部復元径が6cmを測る。

第V章 ま と め

南島先史時代研究の重要な位置を占める陶質の土器である「類須恵器」は、佐藤伸二氏や白木原和美氏により、精力的に調査研究が行われてきた。しかし、その出自等については、まだ不明な点が多かった。^{JST12}

ところが、昭和62年6月に大島郡伊仙町においてカムイヤキ窯跡が発見され、発掘調査が行^{JST13}われた。その結果、残留磁気による年代測定や出土遺物等より、中世の陶質土器の範疇に属する可能性のあることが指摘された。また一方、カムイヤキ窯産にのみ限定して捉えることは、「類須恵器」のすべてを包括できないことも指摘された。このようにカムイヤキ窯の発見は、類須恵器の研究を一段と進めることになった。

本遺跡出土の陶質土器（以下、類須恵器と称する）の大部分は小片であり、その姿の全様を知ることは困難であったが、わかり得た範囲でその特徴をまとめてみる。

整形については、外面に平行叩き・綾杉状の叩きを施し、その後ナデによる仕上げを施すもの、内面に先端が弧状となる格子目の叩きや格子目の叩きを施し、その後ナデ仕上げを施すもの、粗いナデを施すものなどがある。

器種について判断可能なものは少ないが、2・24・40は壺の口縁部であり、口縁部は比較的短く大きく外反するもの、口唇部を平坦におさめるもの、口唇部を平坦におさめて内側に段をつくるものなどがある。33は頸部から肩部にかけての破片であり、ヘラ描きの波状沈線文を有している。

胎土は全体的に精緻であるが、小礫粒や粉末状の粒子を含むものなどがある。色調はその大部分が青灰色であるが、茶褐色を呈するものもあり、内部が焼成温度が低く赤褐色化し、サンドイッチ状を呈するものも多数ある。

カムイヤキ古窯跡から出土した遺物にもこのような特徴がみられることから、本遺跡の類須恵器はカムイヤキ窯系のものであると考えられる。また、この窯の年代は熱残留磁気の測定結果や中国陶磁の器形（玉縁口縁）を模したと思われる出土品などより、12世紀から13世紀と言^{JST16}われており、本遺跡についても同等の時期であると考えられる。

類須恵器について多く出土したものが鉄滓である。奄美諸島において鉄関係の遺物が出土した遺跡は、長浜金久遺跡・面纏第1貝塚・下山田Ⅲ遺跡・前田遺跡等である。長浜金久遺跡からは、兼久式土器と共に釣針等の鉄製品が出土し、面纏第1貝塚からは、貝層最下部より鉄製の釘が兼久式土器と共に出土しており、下山田Ⅲ遺跡と前田遺跡からは、製鉄遺構と思われるものが検出されている。また、ハンタ遺跡発掘調査報告書中の喜界島遺跡分布調査報告では、分布調査により採集された鉄滓の分析が行われている。^{JST21}

本遺跡からは、鉄滓が約40点、フイゴの羽口が3点出土した。しかし、南島特有の出土状況（火山灰の堆積がほとんどないため、包含層がうすく、遺物が混在して出土する状況）であり、遺構も検出されなかったため、時期等については明らかでない。しかし、島中地区周辺において

て鉄に関する何らかの生業が営まれていたことが判明したことは、その生活史を知る上で、今後なんらかの手掛かりになるものであろう。

他の地域との交流を知る資料として、類須恵器のほかに本遺跡から出土したものに須恵器がある。20・36・42・50・51が須恵器である。いずれも小片であるため、器種・時期等は明らかでないが、本土から持ち込まれた可能性があるものである。また、55の内黒土師器についても同様のことと言える。

近世陶磁器については、特徴的なもののがなく、しかも小片であったために図化しえず、出自や時期等についても明確な判断は困難であった。

島中B遺跡の今回の発掘では、層位的立場による出土遺物への考察は出来得なかった。しかし、出土した遺物は奄美諸島の先史時代の文化を探る上で重要なものばかりであり、今後出土の違いが層位的立場から把握されていくことを期待したい。

参考文献

- 註12. 佐藤伸二 「南島の須恵器」『東洋文化』第48・49号 東京大学 1970
白木原和美 「類須恵器の出自について」『法文論叢』第36号 熊本大学法文学会 1975
- 註13. 義憲和・四本延宏 「龜焼古窯」『鹿児島考古』第18号 1975
- 註14. 新東晃一・青崎和憲編 「カムイヤキ古窯跡群Ⅰ」『伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書3』伊仙町教育委員会 1985
- 註15. 新東晃一・青崎和憲編 「カムイヤキ古窯跡群Ⅱ」『伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書3』伊仙町教育委員会 1985
- 註16. 新東晃一・青崎和憲編 「カムイヤキ古窯跡群Ⅲ」『伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書3』伊仙町教育委員会 1985
新東晃一・青崎和憲編 「カムイヤキ古窯跡群Ⅳ」『伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書5』伊仙町教育委員会 1985
- 註17. 三弥久志編 「長浜金久遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書31』鹿児島県教育委員会 1984
- 註18. 牛ノ浜修氏御教示による。
- 註19. 宮田栄二・中山清美 「下山田Ⅲ(東地区)」『笠利町文化財報告書9』笠利町教育委員会 1988
- 註20. 戸崎勝洋・東和幸編 「前当遺跡」『知名町埋蔵文化財発掘調査報告書6』知名町教育委員会 1988
- 註21. 馬原和広・朴廣春編 「ハンタ遺跡」『喜界町文化財報告』喜界町教育委員会 1987



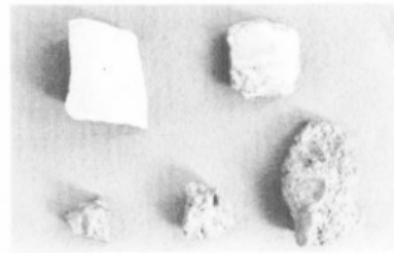
1. 第1地点出土状況



2. 類須恵器出土状況



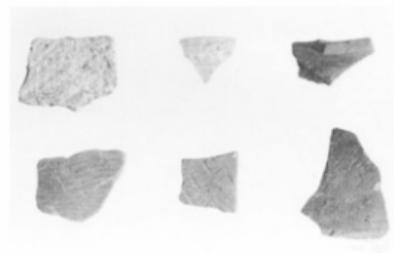
3. A-3区土層断面



4. 第1地点出土遺物(石器・フィゴロ・鉄滓)



5. 第1地点出土遺物(類須恵器)



6. 第1地点出土遺物(須恵器・白磁・類須恵器)



1. 第1号トレンチ出土状況



2. 第1号トレンチ土層断面



3. 第1号トレンチ出土遺物
(フィゴロ・白磁・類須恵器・鉄滓)



4. 第2号トレンチ土層断面



5. 第1地点発掘風景



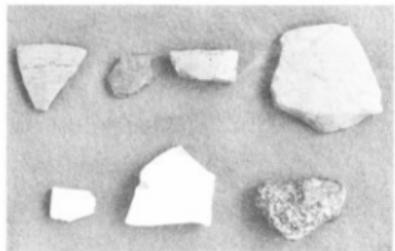
6. 第1号トレンチ発掘風景



1. 第3号トレンチ出土状況



2. 第3号トレンチ土層断面

3. 第3号トレンチ出土遺物
(類須恵器・須恵器・白磁・染付・鉄滓)

4. 第4号トレンチ出土状況



5. 第4号トレンチ土層断面

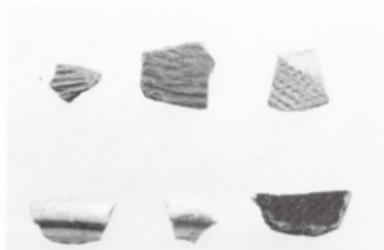
6. 第4号トレンチ出土遺物
(鉄滓・染付・類須恵器)



1. 遺跡周辺での採集遺物 (類須恵器)



2. 遺跡周辺での採集遺物 (類須恵器)



3. 遺跡周辺での採集遺物
(須恵器・白磁・内黒土師器)



4. 第3・4号トレンチ発掘風景



5. 整理作業風景 (水洗い)



6. 整理作業風景 (拓本)



発掘作業員一同

調査作業員 西島リキ子・玉利トヨ子・盛島チズ・豊島照子・野島光枝・東和子・安村ユキエ
東田タツエ・豊島タカ・伏見節枝

整理作業員 下畠節子・喜入カツエ

喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
県営畑地帯総合土地改良事業(島中地区)に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

島中B遺跡Ⅱ

発行日 平成元年3月
発行 喜界町教育委員会
鹿児島県大島郡喜界町湾61
印刷 かわち印刷有限会社
鹿児島市中央町27-16